

建築家・團紀彦氏がオブエドで新国立競技場問題を語る「コンペは設計者でなく設計監修者を選ぶという尋常でないもの」 *DAILY NOBORDER*



新国立競技場問題で、コンペで選ばれたデザインが白紙となったザハ・ハディド氏の事務所は 28 日ホームページ上で声明を発表し、「国際コンペもなしに限られた建設者から選ぶのは良い方法ではないと JSC に忠告したが無視され、見積りの高騰を招いた」とした上で、「JSC は予算増加の原因はデザインだとしたが、キールアーチは 230 億円で建設できる」と述べ、責任を押し付ける JSC を批判した。

ザハ・ハディド氏については、建築家の團紀彦さんが昨日の「ニュース・オブエド」で、「ザハさんは設計監修者なのにコストコントロールの責任にまでされている」とコメントした。

また、團さんはコンペについて、「設計者ではなく設計監修者を選ぶという尋常でないコンペだった。大半の設計経費は名前の出てこない日建設計を中心とする設計者グループに支払われている」とした上で、「建築家・設計者の権限を著しく弱めて、表に出てこない極めて政府よりの設計者が準備されている仕組みだった」と述べ、問題の本質を指摘した。

〈写真：7月28日放送「ニュース・オブエド」より〉

今回の一連の新国立競技場のゴタゴタが意味するものは何か。コンペが始まった段階から参加資格のハードルが高すぎるといった批判が絶えず、その後ザハ・ハディド氏に一等が決まってからも8万人の規模設定が過剰で総工費もオーバーするのではないかという懸念とともにオリンピック閉幕後の維持管理費が膨大なものとなり国民にツケが回ってくるのではといった批判が噴出した。さらには設計見直しのあとに900億円もの工事費アップが公表されるなど果たして誰が血税に対する痛みを感じて計画をコントロールしているのかと首を傾げたくなる様な迷走状態が未だに止まらない。審査委員長だった安藤忠雄氏もこんなにコストが高くなるとは思わなかったなどと他人事のように首を傾げて見せた。建築家とはこれほどまでに社会性と能力がないものなのかと疑問を持つ人もいるだろう。しかし一般的な国際常識に照らし合わせるならこうした失態は極めて稀なものであり、世界中で大小様々なコンペが開催されているがコストオーバーはよほどの理由がない限り認められないのが常識だ。修正案も当初の案の勢いは失われザハ・ハディド氏の代表作には決してなるべくもないものになってしまったように見受けられる。ザハ・ハディド氏はアンビルドの女王であるから構造コストなどには無頓着であるといった指摘もなされているがこうしたコメントは20年前ならばいざ知らず今では必ずしも正しくはない。ザハ・ハディド氏は確かに当初はアンビルドの建築家と言われていたが昨今は韓国のデザインセンターをはじめ中国や韓国、ヨーロッパでも次々と大型の建築物を完成させ世界の注目を集めてから久しい。審査委員長の安藤忠雄氏が施工上チャレンジングなモノの方が日本の技術力を示すことになると言っていたが、すでに見た目にはもっとインパクトのあるものがドバイやソウルや上海などで実現されている事を考えるならばこうした発言は問題のすり替えにすぎず日本の技術を世界に知らしめるようなものではもはやない。本質はそういうところにはない、と私は考えている。

問題の第一はこの国際コンペでは「設計者」ではなく「設計監修者」を選ぶものであったという点である。これは国際的慣例に照らし合わせても非常識なもので私もこの一点を見てこのコンペに参加するのをやめた。医者に例えると「設計監修者」とは責任の伴わない医療コンサルタントの様なものであり実際にメスを持つ執刀医とは異なる。この辺りが国民に理解されていないのはまことに不可思議というほかはない。ほとんどの人がザハ・ハディド氏を設計者だと思っているのではないか。私がこの点にこだわった理由は「設計監修者」はたとえ全体から細部に至る設計をしても「設計者」が別にいればいかようにでも変更を余儀なくされるためにその事の調整に大変不毛なエネルギーを浪費する事になる事と、執刀医としての能力がありながら医療コンサルタントにされるという事は発注者が真の意味でその医者信頼していないからでありこの事が先々様々な信頼関係を損なう原因となると考えるからである。そして何よりもコストコントロールをはじめ安全性の確保やデザインの品質管理に至るまで責任の所在が明確ではない。しかも「設計監修者」を選ぶコンペは国内でも過去の実例が少なく成功例もない。国際コンペに至っては皆無であるばかりでなく国内外を

問わず一流の建築家であれば誰もが背後に何かいわくのある胡散臭いコンペと思うに違いない。海外の審査委員団もこの事を指摘したはずだがそうした経緯は伝わってこない。日本政府は執刀医にもなれる建築家を「設計者」の10分の1の設計料で医療コンサルタントに選んだのである。10分の9の設計料をもらっている本当の「設計者」たる組織設計事務所はだんまりを決め込んでいる。間違っただけの人を選んだということよりも、選び方と条件設定に大きな誤りがあったと思う。またこのように胡散臭いコンペの枠組みによって多数の有能な応募者を逃したことも日本にとっては大きな損失であったと思う。審査委員長の安藤忠雄氏ならば真っ先にこの枠組みを改善すべきところだったにもかかわらずこの点を怠ったことがすべての始まりだったといえる。したがってコストが合わない事を一概にザハ・ハディド氏のせいにする事は誤りであるし、真の「設計者」である日本の大手設計事務所連合が設計に関わる全ての責任者であることをまず認識する必要がある。しかしこの設計連合は「設計監修者」の威を借りて口を揃えてコストアップはザハ・ハディド氏のせいであるとしている。こうして結局は日本のゼネコンの言うがままのコストが通ってしまったわけである。このトリックをイメージが出来なかったのか、こうなる事を計画的に仕組んだのかはわからないが日本以外の国では考えられないような非常識な方式がまかり通ったのである。こういうことが起こらないためにも顔の見える「設計者」を選定しなければならないことを世界の先進国は知っているのだ。国民のことを思えば設計料をケチり、いつでも頭をすげ替えられるような不信感に基づく選定方式を取ったばかりにより粗悪でより高額なデザインを買わされるという誠に恥ずかしい結果になったのである。この背景には建築家や「設計者」といったプロフェッショナルに対する日本の政治家と官僚の無理解が伏在している。日本ではソニーやホンダのように技術者が創設した会社であってもやがては文系の支配下に置かれて技術職は技術屋と呼んで見下す風土が未だに残っている。今回の仕組みもポンチ絵を書く海外の建築家を選べば大手の設計事務所やゼネコンの「技術屋」がなんとかフォローをしてくれるだろうという甘い見通しが見え隠れする。そもそも欧米では建築家、医者、弁護士は三大プロフェッショナルと呼ばれて尊敬されているにもかかわらず建築設計行為を「ポンチ絵を描く人」+「技術屋」としてしか理解できなかった文化の低さがこの結果を生んでしまった。プロフェッショナルは信頼して正しい扱い方をしなければそれに答えてはくれないものだ。プロにもものを頼むということはそれだけリスクのあることだということがどれだけ発注者に共有されていたのか。発注者もコストをオーバーすれば設計を認めないとなぜ言わなかったのか。そうすることでもっと優れた案に発展させるようになぜ仕向けなかったのか。住宅を建てる場合でも施主は専門家である必要はなく住み手の想いや要望を伝えこれだけしか予算がないというだけであとは建築家の創意工夫でいくらでも良い建物ができているのではないか。したがって発注者側の建築チームの使い方にも大きな問題があったのだと思う。海外の建築家を選べば当然協力者としての日本のローカルアーキテクトが必要となるわけで私も台北桃園国際空港の設計者に選ばれた時は台湾のローカルアーキテクトと組んだ。しかしこれはあくまでも私が「設計者」でローカルアーキテクトはその傘下に入ることが前提なのである。口

ローカルアーキテクトは「設計者」が指名し、設計経費も設計者からローカルアーキテクトに支払うことになる。今回の日本の大手建築事務所は国際常識からすればローカルアーキテクトに相当するにもかかわらず実は「設計者」として設計監修者とは別に契約をして巨額の設計費を政府から得ているのである。設計者であれ設計監修者であれトップに立つ建築家を決める前にローカルアーキテクトの目星を発注者が立てていたとすれば発注者サイドに建設利権の洪水を呼び込むことになり言語道断と言わねばなるまい。こうなれば船頭多くして船進まずのようになるばかりか何かあった時も責任者の顔がはっきりしないのも当然と言える。原発事故の時も責任者の顔が見えず関係者はただ想定外という言葉を繰り返すばかりだったことを想起すべきだ。安藤忠雄氏は国際的に著名な建築家でありながらこのことを改善しようとはしなかった。自分が同じ立場に立ったならば絶対に参加しなかったようなコンペの審査委員長をなぜ引き受けたのか。槇文彦氏が義憤にかられて大幅な減額提案をしてもまるで無関心であるかのように頑なに調整を拒否しマスコミからも逃げ回ったのはなぜか。そこには建築家の体質に関わるもう一つの重大な問題が含まれていると思う。安藤忠雄氏は私が学生の頃にはボクサーから不屈のハングリー精神とともに登場した建築家として脚光を浴びつつあった。建築表現も打放しコンクリート一本でその禁欲的な作風には一貫した思想性と哲学すら感じられた。しかし後半になるとその一貫性がブランドを確立するためのものだったことが徐々に明らかになる。確立されたブランドというものは後にはパフォーマンスと権威主義しか残らなくなる。東大教授、文化勲章と突き進んだ氏の輝ける足跡とは裏腹にその作品を通して見える精神にはどこか空虚さが感じられるようになった。かつては多くの学生たちに勇気と希望を与えた建築家が「世界的なブランドになる」ことが最終目的だと感じて氏に対する憧れが失望感に変わった人も多いはずだ。大変面白いことに安藤忠雄氏が選んだザハ・ハディド氏という建築家も若い頃アンビルドと呼ばれて苦労した末に世界のブランド建築家となった人だ。商品としてのブランドは決して体制や権力と戦ったりはしない。ブランドはやはり売れ筋で居続けることが至上命題なのである。古臭いとか流行遅れというレッテルが貼られて社会から振り向かれなくなった時が彼らの終焉なのである。今こうしたブランドを最も好むのは中国とドバイである。そういう世界もあって良いのかも知れないが安藤氏は自ら生きてきた世界の商業主義的グローバリズムとブランドの力が日本にも通用すると考えたのかも知れない。そうだとすれば市民を上から目線で馬鹿にした考え方であり時代錯誤も甚だしいと言わなければならない。世界の建築を取り巻く状況は大きく変化しつつあり防災問題を始め環境問題、都市問題あるいは伝統的な遺産の再生や保存など多岐にわたるジャンルの中で地道な努力を惜しまない多くの優れた建築家が日本にも世界にもたくさん存在している。もはやかつてのブランドたちのマジックは成熟した新しい世界には通用しなくなったと言える。権力と戦うという物騒な響きを持つかもしれないがここでは目の前にある事柄を改善し後に続く人や若い世代により良い建築と建築文化を残すということだ。今回の問題にもし教訓があるとすれば建築家のブランド価値と問題解決能力とは別物であることが明白になったということだ。建築家とは様々な問題を解決しながら新しいヴィジョ

ンを追求してものを創造する職業である。この意味では建築家が究極のブランドになるということはある意味で社会の問題を考えたり解決したりすることを放棄することにつながりかねない。今回はその不毛で滑稽な建築家像が計らずも露呈したのだと言える。この一連の問題で最も気になったのは審査委員長の安藤忠雄氏や一等当選者のザハ・ハディド氏の問題解決に向けた熱い想いがまったく感じられなかったことだ。それどころかかつて尊敬を集めた建築家たちからは想像もできない寒々しい無責任さと国民への莫大なツケだけが残った。コンペのハードルが異常なほど高く、若く無名な才能を排除したことや、空前の規模設定や「設計監修者」という非常識な枠組みに対する提言やコストオーバーその他の事態解決にも無関心だったのはひとえに「ブランドの権威」を過信した不毛な精神からくるものではないか。

「今後の見通しと改善すべき点」 2015年7月28日/團紀彦

0:宮内庁の技師だった折下吉延(おりしもよしのぶ)の業績は、明治神宮の森を始め表参道ケヤキ並木、新宿御苑の造営、絵画館前の銀杏並木など東京の大切なアメニティーを作った。こうした東京の明治からの歴史と伝統をあまりにも無視したことにまず問題の根源がある。神宮内苑と外苑の森の歴史的コンテクストを尊重しその継承と再生に努める。

1: 神宮球場及び秩父宮ラグビー場の敷地入れ替えと建て替えを始めオリンピック後に予定されている計画を明示し本計画との整合性とこの地区の将来のヴィジョンをもっと議論すべきである。

2: そもそも敷地に対して要求面積と要求プログラムが過剰である。東京オリンピック誘致のためにあらゆるプログラムを詰め込みすぎた感がある。このために空地が少なく防災計画も法的にはギリギリ満たしていてももし地震や火災等の災害が起きた時には8万人の避難者に対して十分安全とは言えない。ヴォリュームを小さくした上で隣接する絵画館や東京都体育館との避難計画上の連携を検討してさらなる安全性を確保すべきだ。

3: 周辺の住民から期待されるような景観形成と、楽しさのある生き活きとした街づくりの視点が欠如している。緑を増やししながら銀杏並木から千駄ヶ谷駅に抜ける快適なバリアーフリーのプロムナードを周辺整備計画の中で検討すべきだ。複層で歩車分離をしたプロムナードは緑化をし緑陰のカフェテラスや商業ゾーンと文化施設を適宜配置すれば将来の町の活性化とオリンピック開催時の動線と避難経路に役立つだろう。

4: そもそも 1300 億円、1625 億円の設定と過剰な要求プログラムにも無理があったのではないか。要求プログラムと設定コストの整合性を至急検証すべき。面積を減らす事と、過剰な要求条件を軽微にしなければコストはドラスティックには下がらない。そのためには発注者側も柔軟に周辺施設との連担を至急検討し大幅に条件をスリム化すべきだ。ザハ案のキールアーチを取る取らないという問題ではない。

5: 維持管理費の異常な高さはコンサート開催のための開閉式屋根からくるものでこのためにサッカーとラグビーのための芝の生育も不完全となる。コンサートは収益率を上げるためだとすれば悪循環で本末転倒だ。客席の上だけ屋根をかけながら逆に天空を広く開けた方が構造コストも安くなるのと維持管理費も抑えられるのでコンサートは音響制御装置を導入した限定的な野外コンサートとしてはどうか。

6: ゼネコン選定に自由競争の原理を入れない限りコストは下がらない。発注者と設計者によるゼネコン選定の際にはコストとともに、工期の検証、施工提案、減額提案などゼネコン側からの資料を判断材料とする。

7: 設計監修者選定ではなく設計者チーム選定の国際コンペとすべき。その際にゼネコンと建築家とのタイアップのチームを認めるか、設計と施工を完全に分離した設計者のみの選定方式にするかは議論の分かれるところだろう。工期が間に合うかどうか、コストコントロールができるかがその決め手となるだろう。

8: 審査委員長には適切な人材を充て、全権を付託すべきだ。また審査委員は少人数とし都市計画の専門家と商業プロデューサーなど周辺に対する街づくりと活性化の視点を加えるべきだ。審査委員団は審査委員長が選出する。

9: 審査委員団はコンペ終了後解散せず設計者に対して適宜適切なアドバイスを行う。

10: 日本の大手設計者チームはこれまでのノウハウを持っているので引き続き設計を担当すべきだという意見が見られるが言語道断だ。日建設計は当初三等の妹島和世氏とチームを組んでおり、その後設計監修者となった一等のザハ・ハディド氏に対する設計者となり、コストコントロールの失敗にもかかわらず関係者の中で最も巨額の報酬を得ていることは道理にかなっていない。国民の前でこれまでの経緯を説明すべきである。